

授業外の日本語学習支援と日本語授業との連携の可能性

－日本語ライティング支援を活用した試み－

柳澤絵美・高野愛子

【キーワード】 ライティング支援、授業外日本語学習支援、授業との連携、支援の範囲、意識調査

1. はじめに

(独)日本学生支援機構¹⁾によると、平成21年5月1日現在の留学生数は132,720人であり、過去最高を記録している。留学生の出身地や留学の目的、留学先の大学に求めることも多岐に渡り、多くの留学生を受け入れる教育機関には留学生を支援する制度やシステムの充実が求められているといえよう。

東京外国語大学では、2010年5月1日現在、72の国と地域からの留学生609名が日本語や専門科目などを学んでおり²⁾、チューター制度³⁾、学生相談室⁴⁾、留学生支援の会⁵⁾など、留学生の生活面、学習面を支援する制度が設けられている。これらの留学生支援に加え、東京外国語大学留学生日本語教育センター(以下、センター)では、2008年度から新たな試みとして留学生の「書く」活動を支援する「日本語ライティング支援」(以下、ライティング支援)を立ち上げ、サポートを実施してきた。

本稿では、ライティング支援を活用した文章表現クラスの授業について報告するとともに、授業時間内の日本語教育と授業時間外の日本語学習支援が連携することで、どのような効果や課題が見られるのかを実践報告とアンケート調査から分析する。

2. 日本語ライティング支援の概要

ライティング支援は、東京外国語大学に所属する全ての留学生を対象とした生活面および学習面における「書く」ことの支援を目的として設置された留学生支援活動のひとつである。ライティング支援では、手紙やE-mailなどの個人的文章の日本語チェック、携帯電話やクレジットカードなどの各種申込書および事務手続き書類の作成補助、日本語の授業の担当教師から了承を得た宿題・課題の添削などを行っ

ている。

石塚他(2002)は、教師があるシラバスで同じように教えたとしても、学習者の中に起こる学習はそれぞれ異なることを挙げ、正規の授業外の日本語補習システムは個々のニーズに合わせた多様性を持つ学習空間として提供されることが大切だと述べている。ライティング支援も学習者の生活面および学習面における個別のニーズに対応していくための場として設けられた。

2010年度春学期は、センターのホワイエにサポート用の机と椅子を置き、月・水曜日の午後に1.5時間ずつ活動を行った。サポートは本学で日本語教育を専門に学ぶ大学院生2名が担当した。サポート担当者には事前に添削の方法やサポートの範囲、注意点などについてオリエンテーションを行った。

3. 全学日本語プログラム中上級文章表現クラスの概要

2010年度春学期にライティング支援と連携を行ったクラスは、全学日本語プログラム⁶⁾で開講されている「中上級文章表現514」である。2010年度春学期のこのクラスの履修者数は25名であった。

このクラスの到達目標は、「簡単な報告書やレポートなどが書けるような日本語力を養成する」ことであり、具体的には「話しことば」と「書きことば」の文体の使い分けおよび「引用」、「意見文」、「事実文」の区別に重点を置いて授業を行った。

使用教科書は、友松悦子(2008)『小論文への12のステップ』(スリーエーネットワーク)で、その他に新聞記事等の資料を用いた。この教科書を軸に解説や練習を繰り返し、実践として以下のテーマで400～600字の小論文を書いた。

【テーマ】

- ・自己紹介：好きなこと・嫌いなこと(実力チェック)「です・ます体」
- ・インスタント食品(利点・欠点を比較しながら述べる)「だ・である体」
- ・携帯電話(新聞記事・データを引用する)「だ・である体」
- ・日本で撮ったおもしろい光景の写真(事実文・意見文・引用文)「だ・である体」

作文は、手書きの初稿をワープロで清書し、メールに添付して提出することとした。その理由は、原稿用紙ではあまり感じられないレポートらしさや、レポートを書いたという達成感を学習者に感じてほしかったからである。また、ワープロ原稿にすることで、同じテーマの作文を電子データでまとめることができ、学習者同士でお互いの作文を読み合う活動の際にも、資料が作りやすくなるというねらいもあった。

4. 日本語ライティング支援と文章表現クラスの連携

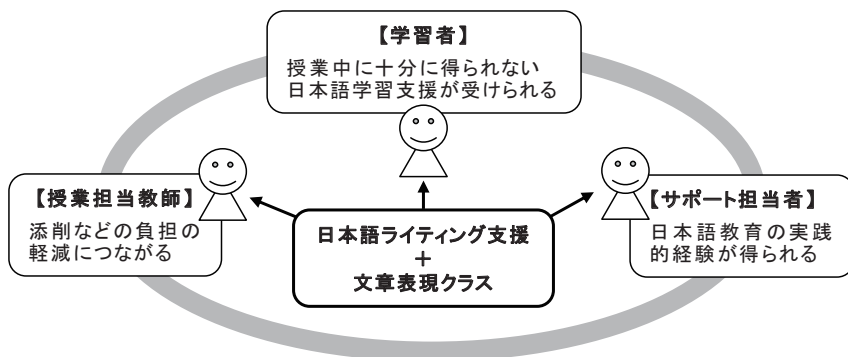
ライティング支援では、学期開始時の留学生向けオリエンテーションでの活動紹介や、学内掲示板・教室へのポスターの貼り付けなどを行ったが、周知が不十分であったり、ライティング支援の活動時間と学習者の授業時間が重なってしまうこともあり、安定した参加者数を維持できないという課題があった。

一方、文章表現クラスでは、履修者が増加しており、25名分の作文添削にかなりの時間と労力がかかること、90分という限られた授業時間ではサポートしきれない部分も出てくることが予測され思案していた。この両者の要望が一致し、2010年度より新たな取り組みとして、ライティング支援と文章表現クラスとの連携を試みることになった。

池上(1995)は、学習者の多様性に対応するための方法として、指導の「個別化」を挙げている。そして、多人数の学習者内での個人差が大きく、何らかの配慮や対応が望まれる状況においては、既存のカリキュラムに個別指導のカリキュラムを組み込むことで積極的な対応が可能になると述べている。今回の取り組みにおいても、効率と均質性が求められるクラス授業と学習者の個別のニーズに対応できるライティング支援を組み合わせることで、学習効果を高めることに貢献できるのではないかと考えた。

授業外の日本語学習支援を活用することで、学習者は授業時間だけでは十分に得られないフィードバックなどの日本語支援が受けられ、授業の担当教師にとっては添削に関わる負担の軽減につながり、ライティング支援の担当者にとっては日本語教育の実践的な経験を得る機会となることから、三者にとって利点があり、有機的な連携が可能になると考えた(図1参照)。

図1: 文章表現クラスとライティング支援の連携によって期待される効果



4.1. 支援の範囲と手順

連携における支援の範囲としては、初稿は授業担当教師が添削し、その添削をもとに学習者が書き直してきた清書のチェックをライティング支援で担当することにした。これは、学習者が書いた作文の添削を全てライティング支援で担当しては教師の役割と意義が失われること、また、教師が初稿を添削することで、学習者の問題点を正確に把握し、その後の指導に生かすことができるためであった。

清書はワープロで作成して提出することにしていたため、ワープロ特有の打ち間違いや、漢字の変換ミスなどの新しい間違いが発生する可能性があった。そのため、ライティング支援では、表現や文法が添削した通りに正しく直っているかの確認の他に、打ち間違いのミスについてもチェックを行った。学習者には、ライティング支援でチェックを受けて完全に直ったものをワープロ完全版として教師にメールに添付して提出するよう指示した。

図2は学習者に配布した資料であり、作文作成のための語彙や文法の導入から清書の提出までの一連の流れを示した進行表である。ライティング支援と連携した部分を太枠で示す。

図2：作文提出までの進行表

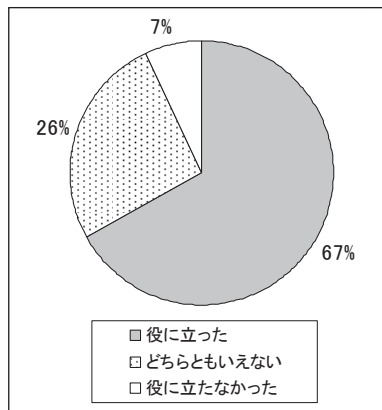
作文のテーマ：「 」 について	
授業	①テーマについて 【語彙と文法】キーワード・文型 【問題の整理】討論のポイント確認 → グループ討論 話し合いながら、自分が書きたいポイントをまとめる。
考えをまとめておく	
授業	②作文を書く ◆文体：だ・である体(普通体) ◆字数：400～600字
高野が添削	
授業	③添削した作文を返す 赤字 → 文法・漢字などのまちがいを正しく直してある 青字 → 文体がふさわしくないところ。 △→ふさわしい表現に
宿題	④清書 作文を正しく書き直す＝Wordでワープロ清書をする

96%がライティング支援を活用していたことがわかった。活用頻度は、図3に示す通りである。学期中に出された4回の作文課題全てにおいてライティング支援を活用した学習者は全体の53%であり、次いで2回と1回が20%、3回が7%であった。活用率が低かった学習者にその理由を聞いたところ、「時間がなかった」、「チューターに見てもらった」という2点が挙げられた。

次に、感想の部分でサポートの回数について聞いたところ、「ちょうどいい」が60%、「少ない」が40%であり、「多い」という回答はなかった。1.5時間というサポート時間については、「ちょうどいい」が60%、「短い」が47%であり、「長い」という回答はなかった。時間帯の適切さについては、「どちらともいえない」が47%、「適切」が33%、「適切ではない」が20%であった。適切ではないと回答した理由は、その時間に授業があり、サポートを受けることができなかったためというものであった。

サポートの内容については、図4に示す通り、「役に立った」が67%、「どちらともいえない」が26%、「役に立たなかった」が7%であった。役に立ったと答えた理由としては、「清書をよく確認してくれたから」、「わからなかったり忘れてしまったりした部分を説明してもらえたから」、「授業の時によくわからなかったことを説明してくれたから」などが挙げられた。役に立たなかったと回答した理由は、「サポートの内容が清書のチェックだけだったから」というものであった。

図4：サポート内容について



サポート時の説明のし方については、「わかりやすかった」が79%、「どちらともいえない」が21%であり、「わかりにくかった」という回答はなかった。わかりやすかったと回答した理由としては、「簡単な言葉を使って説明してくれたから」、「直してもらった文法のどこがなぜ間違っているのかがよくわかったから」などが挙げられていた。「どちらともいえない」と答えた理由は、「間違ったところが少なかつたため、あまり説明をしてもらわなければならないから」であった。

自由記述では、「留学生のためにサポートを続けた方がいいと思う」、「ライティングセンターは個人的に大変役に立ったので来学期もぜひ利用したい」、「サポート担当者が1人だけであるため、ちょっと足りないと思う」という意見が挙げられていた。

5.2. サポート担当者へのアンケート調査

ライティング支援のサポートを担当した大学院生2名に、サポートの回数について聞いたところ、両名ともに週2回というのは多すぎず少なすぎずちょうどいいと評価していた。しかし、サポートの時間の長さについては、学習者が列をなして時間内に全員の作文が見られない日がある一方で、参加者がほとんど来ない日もあったため、最適な時間の長さを判断するのは難しいということであった。

サポートの様子については、清書をチェックするために要した学習者一人当たりの時間は10～15分であり、説明や指示はほとんど日本語で行っていたことがわかった。学習者が持ってくる清書された作文は、授業担当教師の指摘通りにほとんど修正してあったが、一部の学習者は表現を変えたり、更に手を加えたりしており、これらの修正は多くの場合、意味の通る文になっていたようである。

サポートにおいて工夫した点としては、「できるだけ簡単な日本語を使い、英語を使わないようにしたこと」、「何が間違っているのかを学習者自身に考えさせるように心がけたこと」、「本人の不注意や努力不足と感じられるときは、もう一度自分で考えてくるように指示したこと」などであった。

サポートの際に困ったこととしては、「辞書などを使って非常に難解な言葉を使ってきた場合に、どこまでを許容範囲とするべきか迷ったこと」、「添削においては自分の感覚に頼ってしまうことも多く、添削に自信が持てないことがあったこと」などが挙げられた。

サポートを通して役に立った点があるか聞いたところ、「学習者にとってどんなことがわかりづらいのか、どんな疑問を抱いているのかを知ることができ、それを説明することは想像以上に難しいということが改めてわかった」、「簡単なことばで難しいことを説明することを意識するようになった」、「学習者が間違いやすい箇所共通点があり勉強になった」、「会話レベルと書くレベルに大きな差がある学習者がいることがわかった」という回答であった。

自由記述においては、「来る学習者が決まっていたので、もっと多くの人に利用してもらいたい」、「きっかけは先生からの紹介でも、その後、自主的に通ってくる学習者がたくさんいたのが印象的だった」、「潜在的な需要がもっとあるのではないかと思う。今後より多くの学習者にライティング支援について知ってもらい、体験してもらって、その後の学習に役立ててもらえたらと思う」という意見が聞かれた。

5.3. 文章表現クラス担当教師への聞き取り調査

文章表現クラスを担当した教師に今回の連携による効果について聞いたところ、添削作業の負担軽減が挙げられた。中上級文章表現クラスは、受講者が多く、25名分の作文添削にはかなりの時間を要したという。さらに、作文の清書をワープロ原稿で提出することにしたため、通常の添削に加えてワープロ入力の際に起こる打ち間違い（入力ミス・漢字変換ミスなど）についても確認が必要となり、二重の手間となっていたと報告している。今回、ライティング支援に教師が添削した元原稿とワープロで作成された清書の突き合わせ作業を依頼したことで、授業担当教師にとっては、大きな負担の軽減になったということであった。

課題については、まず、一部の特定の学習者のみがライティング支援を継続的に活用して清書の提出をしており、全員がサポートを受けたわけではなかった点を挙げている。今後は、クラスを受講している学習者のリストを共有し、進捗状況などを把握しながら、積極的な活用を促していきたいということであった。

次に、内容的な面として、ライティング支援で行うサポートの範囲について課題が見られた。2010年度春学期は受講者が25名と多かったため、添削は言語表現的なチェックに終始し、内容的な評価を書くことや、添削後の個別のフィードバックがほとんどできなかったという。今回の連携において、ライティング支援では、ワープロの清書が添削した通りに直っているかどうか、入力・変換ミスがないかの確認を原則としていたが、今後は教師が見落としした間違いや、担当者が読んで気づいた点などがあれば、その指摘や修正も積極的に行ってほしいということであった。また、限られた授業時間内では対応が難しい質問に対する説明、内容についての感想やコメントなども期待したいとのことであった。

5.4. アンケート調査および聞き取り調査から見てきたこと

学習者とサポート担当者へのアンケート調査および授業担当教師への聞き取り調査の結果から、まず、効果が見られた点として、学習者はある程度ライティング支援を活用しており、おおむねサポートは分かりやすく役に立ったと評価していることが挙げられる。また、ライティング支援では、清書のチェックを中心的なサポート内容としていたが、実際には授業中に教師に聞けなかった質問や清書の際に出てきた疑問点についても依頼があれば対応しており、学習者からも評価されていた点はよかったといえる。これは90分という限られた授業時間内では教師が対応しきれない部分を授業外の日本語学習支援で補える可能性を示唆しており、今後、サポー

ト内容の広がりを考える上での参考になるといえよう。

サポートを担当した大学院生にとっては、実際に学習者と向き合い、サポートをすることで、日本語教育の実践的な経験を積めたことが大きな利点であったと考えられる。サポート担当者には、事前に添削のし方やサポートの際の注意点などについて打ち合わせを行ってはいたが、そういった知識だけに頼るのではなく、現場でのやり取りや清書のチェック作業の中で、学習者にとって何が難しいのか、どんなところを間違えやすいのかに気付き、自分の話し方や質問への答え方などを工夫していた。これは、大学院生が実践を通して自ら気付き、身に付けた力であり、今回の連携で得られた成果のひとつといえるだろう。

授業の担当教師からは、作文の添削にかかる時間と労力の軽減につながったことが評価された。今後、サポートの範囲が広がれば、負担の軽減だけでなく、大学院生の指摘や意見から教師が新たな視点や気付きを得て、その後の教育の充実に生かしていくという効果も期待できるのではないだろうか。

今後の課題としては、サポートの回数(週2回)と時間の長さ(1.5時間)の検討が考えられる。この2点について、アンケート調査では「ちょうどいい」という意見が最も多かった。しかし、詳しく見ていくと、添削を希望する学習者が多い日には時間が足りなくなることがあり、一方で、参加者が少なく時間が余ってしまう日もあることが明らかになった。学習者のニーズに応えられる適切なサポート時間を設定するためには、まず、安定した参加者数の確保と維持が課題になるといえよう。しかし、ライティング支援は、あくまでも授業外の日本語学習支援であるため、そこでチェックを受けることを授業で義務付けることについては判断が難しい部分もあるだろう。全ての学習者に都合がいいサポートの時間帯や長さを見つけることは難しいが、今後、可能な範囲で検討・調整をしていきたい。

最後に、どこまでライティング支援にサポートを任せるかという支援の範囲についての検討が必要であるといえる。今回の連携では、教師が添削した通りに清書が直っているかどうかの確認をサポートの中心としてきた。しかし、添削された初稿と清書の突き合わせをするだけでは「あまり役に立たない」と感じる学習者も少数ではあったが見られた。また、授業の担当教師からも、教師が添削した部分以外の間違いについての指摘・修正、学習者からの質問への積極的な対応などが期待されている。さらに、支援できる範囲が広がれば、サポート担当者である大学院生にとっては、より多くの実践経験が積めることとなる。三者にとって利益のある有意義なサポートとして機能していくために、今後はサポートの範囲を広げることも検討し

ていく必要があるといえよう。

5.5. 日本語教師への意識調査

今後の授業時間外学習支援と日本語の授業の連携を考えていく上での参考資料として、センターで日本語を教えている現職の日本語教師13名を対象に文章表現クラスに関する意識調査を行った。

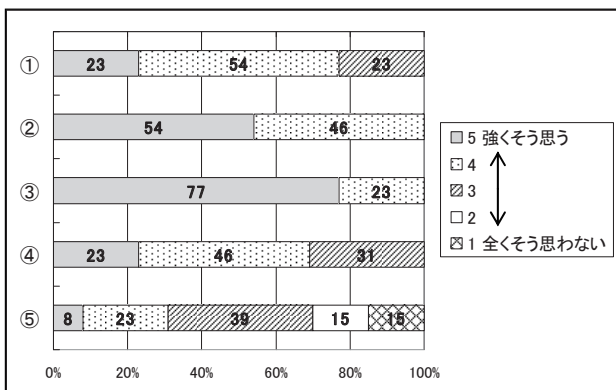
この意識調査では、図5に示したの①～⑤の質問項目について、「5：強くそう思う」から「1：全くそう思わない」の5段階で回答を得た。

①の質問に対する回答を見ると、23%が「5」、54%が「4」と回答しており、全体の77%の教師が文章表現クラスでは、できるだけ多くの作文を書かせたいと考えていることがわかる。次に、②の

結果を見ると、「5」が54%、「4」が46%であり、「3」以下を選んだ教師はいなかったことから、作文は他の人の力を借りずに学習者が自分の力で書いてほしいと強く思っていることがわかる。さらに、③の結果から、77%が提出された作文は教師が自分で添削したいと強く思っており、そのためか、④に見られるように、文章表現クラスの受講者が多い場合には、作文の添削などが大きな負担となっていることが明らかになった。

「学習者には多くの作文を自分の力で書いてほしいが、学習者が多ければ添削は教師にとって大きな負担になる」という現状において、授業外の学習支援が貢献できる可能性を探るために、⑤で作文の添削やチェックを授業外の学習支援などに頼むことに抵抗があるかどうかについて聞いたところ、「3」という回答が最も多く

図5：文章表現クラスに関する日本語教師の意識



- ①文章表現クラスではできるだけ多くの作文を書かせたい
- ②作文は他の人の力を借りず、自分の力で書いてほしい
- ③提出された作文は全て自分で添削したい
- ④文章表現クラスの履修者が多い時、作文の添削などの教師の負担は大きい
- ⑤作文の添削やチェックなどを他の人(教務補佐や授業外学習支援など)に頼むことには抵抗がある

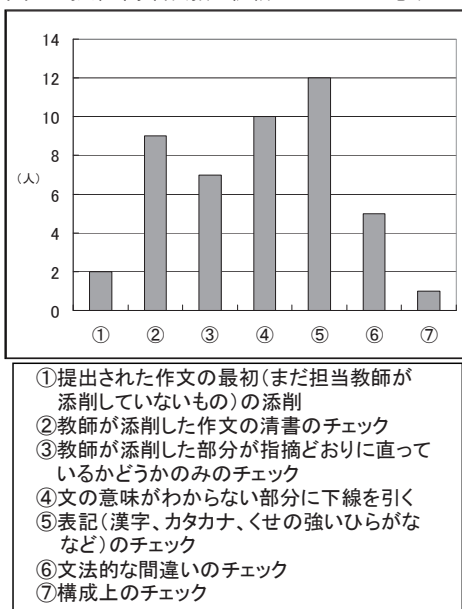
39%であった。授業担当教師以外が添削に関わることに否定的であることを示す「5」または「4」は合計で31%、比較的抵抗がない「2」または「1」という答えは最少なく合わせて30%であった。この結果から、作文の添削を教師以外の人が担当することに対しては抵抗が強い傾向にあることがうかがえた。そこで、条件をしばらく、授業外学習支援にサポートを依頼してもいいと思うものを、図6に示した7項目から選んでもらった(複数回答可)。

図6を見ると、表面的な要素である「⑤表記のチェック」は12名の教師が授業外学習支援に依頼してもいいと考えていることがわかる。その次に多かったのは、添削をするのではなく、「④文の意味がわからない部分に下線を引く」という、指摘のみの支援であり、「②教師が添削した作文の清書のチェック」と続いている。作文の構成に関わる部分や、まだ教師が添削していない状態の作文の添削を他の人に依頼することには、ほとんどの教師が抵抗を感じていることが明らかになった。

自由記述では、「どんな作文を書かせるのか、どんな学習者が対象かによって依頼可能な内容は異なる」、「内容についての感想やコメントを伝えてほしい」、「添削を依頼する際は、その基準などを事前に打ち合わせておく必要がある」、「授業中に教師に質問できなかった部分について対応してもらえると助かる」といった意見が聞かれた。

以上の結果から、ライティング支援が文章表現クラスとの連携において貢献できるものとして、「一度、教師が添削した作文について、構成や内容に関わる部分および学習項目でもある文法的な要素以外の表面的な部分の確認または添削作業」が考えられる。さらに、連携に向けては、授業担当教師と授業外学習支援との間で事前に十分な打ち合わせを行い、作業の棲み分けや添削の際の注意点などについてよく理解しておくことも重要であるといえよう。池上(1995)も、大人数への一斉授

図6：授業外学習支援に依頼してもいいと思うもの



業と並んで、個々の学習者への個別的な支援を実現させていくためには、教授者同士が連携を保ち、情報交換をすることが重要であると述べている。

6. まとめ

本稿では、文章表現クラスとライティング支援が連携する取り組みを通して、授業外日本語学習支援が日本語教育に貢献できる可能性を探ってきた。

アンケート調査および聞き取り調査の結果から、今回の連携は、サポートを受けた学習者、サポートを担当した大学院生、授業担当教師の三者にとって利益がある活動となっていたことがうかがえた。しかし、学習者の積極的かつ継続的なライティング支援の活用や、それを可能にするための環境作り（例：サポート時間の長さ、時間帯など）、日本語の授業との有機的な連携をはかるためのサポート範囲の検討などにはまだ課題があることが明らかになった。また、今回のアンケート調査では出てこなかったが、サポート場所の環境整備にも検討が必要だと考えられる。現在は、センターの一角にあるオープンスペースに机と椅子を並べて活動を行っているが、柳澤（1993）は、学習者の個別化のための援助の提供要件として、各種教材や資料が準備され、自分のペースで学習が進められるセンターの存在を挙げている。教室以外の場における学習者の主体的・自律的な学びを促進する環境の整備は今後の大きな課題であり、そういった環境の中に授業外学習支援を置くことで、より効果的な学習効果が得られるのではないだろうか。

ライティング支援では、学習者の生活面および学習面のサポートを行っているが、本学では、チューター制度が充実しており、サークルや各種イベントなどに参加して日本人学生との積極的な交流をはかる学習者も少なくない。そういった状況の中で、日本語について質問があった場合、週に2回、1.5時間だけ開かれるライティング支援より、いつでも連絡が取れる日本人学生に助けを求めるのは自然なことであろう。では、ライティング支援はどのような形で貢献していくことができるのだろうか。そのひとつは、今回の取り組みで行った日本語の授業との連携だと考えられる。意識調査の結果から、日本語教師は自分以外の人に作文の添削を任せることには慎重であり、任せるのであれば、サポートの範囲や添削の基準について事前に打ち合わせが必要であると考えていることがわかった。こういったことを学習者のチューターや友達一人ひとりに徹底することは非常に難しい。しかし、ライティング支援であれば、担当者は固定されており、教師と打ち合わせをした上で、一定の基準や範囲を守りながら支援をしていくことが可能となる。また、ライティング支

援で受けた学習者からの質問や指摘を教師に伝えることで、次の授業に生かしていくこともできるだろう。さらに、サポート担当者が日本語教育を専攻している大学院生であるという点もサポートを任せやすい理由となり、大学院生にとっても実践的な経験を積むいい機会となることから有機的な連携が可能になると考えられる。今後は、より多くの日本語クラスとの連携に取り組み、学習者、サポート担当者、授業担当教師の三者にとって利益がある充実した授業外日本語学習支援を目指して活動を行っていききたい。

【注】

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構 HP
(http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data09.html)
- 2) 東京外国語大学 HP (<http://www.tufs.ac.jp/abouttufs/outline/data.html>)
- 3) 留学生の学習と研究の向上を図ることを目的とした支援（日本人学生が留学生とペアになりサポートにあたる）
- 4) 修学上の問題、進路、からだや心の健康、日常生活の問題など、様々なことについて相談することができる支援
- 5) 留学生への日常生活支援、暮らしの情報提供、日本理解及び交流の場の提供、友好・親善イベントの開催の4点を中心とした活動を行っている留学生支援
- 6) 東京外国語大学で学ぶ留学生に対して日本語の運用力向上を目指して開講されているプログラム

【参考文献】

- 池上摩希子 (1995) 「教授・学習過程における積極的な個別化に関する考察と提案」『中国帰国者定着促進センター紀要』第3号 pp.108-127
- 石塚京子・金庭久美子・齋藤伸子・槌田和美 (2002) 「留学生支援に必要なことは何か－東京国際大学日本語補習システムの学習記録の分析－」『小出記念日本語教育研究会論文集』10 pp.89-105
- 柳澤好昭 (1993) 「学習者の個別化と教育改革」『日本語教育論集』10 国立国語研究所 日本語教育センター pp.1-20